

【前半1から】

《コーディネーター M》

このスライドは、「T-over人権教育研究所・人権こども塾」のホームページです。ぜひ「T-over」で検索してご覧になってください。このホームページの写真は、1994年11月、全国同和教育研究大会徳島大会前日に実施したI中学校の全校全体学習の公開授業の写真です。この中心にいる授業者は、Y先生です。Y学級の公開授業の後、全校生徒による全体授業を実施しましたが、その授業者は、現在、美馬市立E中学校校長のK先生で、本日このフォーラムに参加しています。

この全校人権学習に、中学1年生として、このI中学校の体育館にいたのが、パネリストの2人です。2人は、1994年度から3年間、熱い想いが溢れる全体学習を体験し、1997年3月にI中学校を卒業っていました。

この写真の全校人権学習における中学3年生と中学1年生の学年の枠を超えた「共感と連帯」「信頼と尊敬」の語り合いは、今も私の心に生き続けています。子どもたちがマイクを握り、本気で語り合う言葉には、いつも人権学習の可能性とよろこびを味わい続けています。

冒頭に、教育長さんから、この人権学習のよろこびについて語ったNHKラジオ深夜便「人権インタビュー」についてお話をいただきましたが、このラジオが1つのきっかけとなって、教職1年目の1982年度に学習会専任指導員として勤務した母校のY中学校に臨時教員として勤務することになりました。教師になって44年目です。

その年に出会った部落出身の女子生徒が、その後小学校の先生になり、部落差別を乗り越えた結婚式の招待状が、結婚差別をテーマとした道徳資料「峠」の、冒頭の結婚式の招待状として引用させていただいています。

Y中学校は、私にとって大事な場所です。その場所に、43年の教員生活を終えて、勤務できるよろこびは、本当に大きなものがありました。そして、そのよろこびが、より大きくなる瞬間がありました。それは、新転入職員とY中学校の管理職との打合せの場で起こりました。2025年3月25日午前10時、Y中学校の会議室で待機している私に「M先生」と声がかかります。聞き覚えのある声に、まさかと思い振り返ると、1990年代にI中学校で全体学習に取り組んだG先生がそこにいました。私の中に、とてもないよろこびが溢れた瞬間でした。Y中学校でI中学校のようなドラマが始まると予感した瞬間でした。

その後の校長との面談で、私は大きな喜びを噛みしめるように、私の想いをひたむきに伝えました。それは、Y中学校への私の溢れる想いです。

1993年度、私は、私の血を流すように文部科学省(当時文部省)道徳資料「スダチの苗木」と「峠」を書きました。これは、全部本当のことです。これは、Y町のことをY中の子どもたちのために書いた資料です。当時、私はI中学校にいましたが、Y中学校の子どものために書いたんです。

そして、このNHKラジオ深夜便「人権インタビュー」は、Y中学校という地名も固有名詞も出しませんでしたが、Y町に生まれた私のことを語ったし、Y町の部落の子どもたちへの思いに馳せて語った言葉です。

この言葉は、今もY中学校の若い先生に、いろいろな場面で繰り返して語っている言葉です。Y中学校での教師としてスタートしたこと、まさに「人生の大いなる峠」です。この、前のパネリストの2人とも、ずっと詩「峠」(作:真壁 仁)の授業でつながっています。ずっと、1年のスタート、人生の節目節目が「峠」なんです。

今、私は教師になって44年目の「峠」です。中学3年生を担当させていただいている。中学3年生の子どもたちに「峠」を語ります。中学3年のスタートライン、一人一人の思いを語る学級開きの参観授業を実施しました。

今のY先生の話にもありました、(身体からほどばしるように)人権学習は「語り合い」です。語り合えたら喜びです。そこに深い深い信頼関係が生まれます。このパワーポイントで紹介するのは、学級開きの参観授業の音声です。多くの保護者がみつめる参観授業において、生徒一人一人がマイクを握って語る。かつてI中学校で取り組んだ全体学習のように、体育館でマイクを握るという取組はなかなか難しいです。教室でマイクを握って語る声が、そこにいるお父さん、お母さん、保護者のみんな聞こえるんです。そういう語り合いの人権学習に取り組んだんです。

その語りの中で、私が担任している支援学級の生徒が語った言葉を紹介します。この語りの音声は、当日来れなかつたお母さんに、家庭訪問で聴いてもらいました。私の学級開きの詩「峠」に学ぶ人権学習の講話を受けて綴ったレポートを元にし

た語りです。原稿を持つことなく、自分の言葉で教卓から胸を張り、堂々と語る姿に感動が溢れます。

【2025年4月20日(日) 詩「峠」(真壁 仁)に学ぶ学級開きの参観授業】

私は1年後、自分に自信の持てる人になりたいです。私はみんなの前に立って発表することがすごく苦手です。かんだり詰まつたりしたら笑われてしまうんじゃないかと思い、自分に自信をなくし、いつも発表することを恐れていました。

でも、いざ発表すると、そんなことなくみんな真剣に聞いてくれます。だから、これからはたくさん発表して、ちょっとずつ自分に自信を持ち、みんなの前に立って堂々と発表できる人になりたいです。そして、相手の話や意見に耳を傾け、尊重できる人になりたいです。相手が発表する時は、発表する人の方に身体を向け、一生懸命聞き、自分が発表する時は、みんなの目を見ながら堂々と発表したいです。

1年後、面接でも面接官の目を見ながら自分のことを自信を持って伝えられる人になり、そして、相手の話をしっかりと聞ける人になっていきたいです。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

原稿もなしに、みんなの前に立って、みんなの方を向いて、みんなの視線を感じながら、保護者の視線を感じながら、語り切った達成感は無茶苦茶大きいです。この1分、2分の語りを通して、子どもたちは無茶苦茶成長するんです。語り合いというものは人生を変えます。語り合いは嬉しいことがいっぱいあります。

2025年度Y中学校の教育記録(週録)の4月15日(火)の頁に次のような記載はあります。

【3時間目の社会の授業が終わり、パソコンの片づけをしている所に、2人の生徒が近づいてくる。2人は従兄弟同士。

「先生、TYの孫です。じいちゃんが、小さい頃先生と仲良しだったと言っていました」と笑顔で語りかけてくる。

私の中に、よく遊んだTY君の笑顔がよみがえり、「Y中学校に異動することができて良かった」と伝え、2人と最高の笑顔で握手をする。】

この2人の男子生徒は、社会科を減茶苦茶頑張るようになります。

このスライドは、豊田雅俊といって、I中学校3年B組において、1991年度全日本中学校道徳研究大会特別公開授業で、私が文部省道徳教育読み物資料作成協力者会議の委員になる道徳授業を実施したクラスI中学校3年B組にいた男子生徒です。

この生徒は、柔道で四国チャンピオンになり、徳島商業高校柔道部で活躍することを熱望していた生徒でしたが、身体が小さいということで、柔道の道を諦め、穴吹高校に進学し、穴吹高校レスリングに取り組んだ生徒です。その生徒は、柔道からレスリングに夢が大きく変わった時、自分自身を生き方を鼓舞するように、クラスメートにレスリングでオリンピックに出ると宣言しています。その思いを綴った生活ノートには、オリンピックのチャンスとして、19歳、23歳、27歳とチャレンジを綴っています。彼は、3回目のチャレンジ、27歳で2004年のアテネオリンピックに日本代表として出場しました。

彼は、I町で初めてのオリンピアンとなり、彼が中学時代に「オリンピックへの19歳、23歳、27歳の夢」を綴った生活ノートは、I町の広報に掲載されています。

その生活ノートが、「オリンピアン豊田雅俊さんに学ぶ人権学習」の資料になっています。彼は、昨年のパリオリンピックレスリングの監督を務め、度々徳島新聞に紹介されています。

(嬉しさがあふれ、言葉に力が入る)写真は、2025年1月25日にY先生と人権教育の研修会で行った横浜で、豊田君のパリオリンピックの祝勝会をした写真です。豊田君の隣にいるのは、2016年度の鳴門市人権地域フォーラムでパネリストを務めてくれたI中学校の同級生2人です。一人は横浜に住んでいます。一人は鎌倉に住んでいます。後の3人の先生が、このフォーラムに参加いただいたことのある神奈川県の教員です。8人で楽しい時間を過ごしました。

この豊田君の言葉は説得力があります。豊田君の言葉です。

「結果よりも努力が大事なんだ。勉強に負けるな。本気の語り合いが生きる力になるんだ。」

この「オリンピアン豊田雅俊さんに学ぶ人権学習」の語り合いにおいて、新学期早々の4月15日(火)に「TYの孫です。じいちゃんが先生と仲良しだったと言っていました」と挨拶に来た生徒の語りです。自信に溢れる堂々たる語りです。

【2025年7月2日 オリンピアン豊田雅俊に学ぶ人権学習での語り】

僕は、豊田さんのやった努力ということについてしゃべりたいんですけど、僕は正直、社会とか20点とか30点しかなかつたんですけど、M先生にテストの前から「先生、僕、絶対ええ点取りますから」と言って、その日から社会の勉強をしていたら70点の高得点が取れて、努力って報われるんだなと思ったのと、M先生の言った「言霊」ということわざってあるんだなと思ったんです。最後に、この話の関係なんんですけど、先生の「俺の目を見ろ！」っていうこの言葉が心に響いて、道徳の時間って、やっぱりコミュニケーションって大事で、目を見て話を聞いたり話をせなあかん状況って絶対にあるんで、そんなことをしていかな進めないっていうことがわかりました。これで終わります。(拍手)

本気で語った言葉は、生きる力を育んでいきます。その語りは、仲間の力にもなっていきます。仲間の力になるということは、自分自身の大きな力になっていくんです。

そして、2025年7月18日(金)、1学期の終業式の日です。Y中学校は、本当に良い学校です。これは、同じ3年生を担当しているI中学校時代からの同志C先生のおかげです。終業式の日は、本来バタバタで終わるんです。

でも、この終業式の日に、1時間、授業を確保して、「1学期の集大成として取り組む語り合いの人権学習」を実施したんです。Y中学校の第3学年は、2クラスです。この2クラス一緒に集まってマイクを握って語り合つたんです。それは、I中学校で繰り返し取り組んできた全体学習の取組です。

前日に行われた『ぱあわーあっぷ』(一般対策として実施されている学習会:「パワー」+「阿波」+「アップ」と「Y友の会」(部落問題学習に取り組む学習会)との交流会に参加した男子生徒の語りです。

ずっと遠くにあった部落差別が、私のY中学校への人事異動で、すぐ近くにやってきたこと。人権問題に対して、本気で語る人間になりたいという想いが溢れる発言です。この発言で私の中に眠っていたマグマが奮い立つようになりました。それは、私だけでなく、この全体学習の最後に語ってくれた3人の先生の発言にも大きな影響を及ぼしていきます。Y中学校における人権学習の目覚めとなる発言です。

【2025年7月18日 1学期に取り組んだ語り合いの人権学習の集大成としての語り】

僕がこの人権学習で学んできたことは、Y町に差別があったという体験談を語られたことです。M先生が語っていた通り、Y町にはもともと差別があって、M先生がやられていたっていう経験談を聞いて、何て言うんでしょう。他人事のように最初は考えてしまつたんですけど、話を聞いているうちに、自分でも差別をなくしていくためにどう行動していくかなという考えた方に変わって、昨日『ぱあわーあっぷ』での活動として、(Y友の会との)討論会に行かせてもらった時に、いろいろな方の発言とかを聞いて、自分も発言をしようんですけど、それで気づいたのが「語られる側」と「語る側」の人の発言の違いということに気づいて、「語られる側」の人間の発言する時っていうのは、呼びかけとかそういう発言なんんですけど、「語る側」の人間っていうのは、(差別を)なくしたいっていう思いで語っていることに気づいて。

それって僕やって「語られる側」の人間で、浅はかな発言で後悔ではないんですけど、思つてしまつたという点があります。これから自分、どうしていこうかなと考えた時に、(豊田)雅俊さんの努力の話とかを聞いた時に、じゃあ、これから自分は差別をなくすことって難しいと思うんですけど、1つでも減らすことは可能なので、減らしていくために『ぱあわーあっぷ』や、そういう団体(Y友の会)ではないんですけど、そういうところに話し合いに行ったりして、世界中の人たちにも呼びかけてって言い方にはなるんですけど、そういうのをしていくって、1つでも減らしていくかなって思いました。ご清聴ありがとうございました。

中学生の本心をさらけ出す言葉は、見事です。マイクを握るたびに成長します。語るたびに成長します。

「語られる側」と「語る側」という訴え。皆さん、わかりますか？部落問題の当事者、Y友の会のメンバーが語る言葉と、そこに参加された校長先生や教頭先生の言葉の違いに気がつくわけです。熱のある言葉に熱いものを感じるんです。実際、どの

先生方にも、差別をなくしたいという気持ちはあります。でも、その夜に語られたY友の会の皆さんの語りが、そこに込みあげる熱と光、溢れる想いが子どもたちの想いを引き出していきました。

この発言がきっかけで、『ぱあわーあっぷ』に参加している子どもたちは、Y友の会(部落問題学習会)に参加するようになりました。それは、この語りをした生徒のおかげであり、この時の交流会に参加した子どもたちのおかげです。この営みは、私にとつても、いっぱい出会いや再会が広がっていきました。やっぱり人権教育の絆に心から感謝しています。

さあ、皆さん、この3年全体での集大成の語り合い、この全体学習の最後に語った3人の教師の言葉です。まず、30年前、I中学校で1996年度卒業生を3年間担任したC先生の語りです。

【2025年7月18日 思いを語った生徒へのメッセージ(1996年度I中学校卒業生の学級担任 C)】

みんなの本当に緊張する中で、いっぱい意見を聞かせてもらって私もいろいろ考えました。人権の勉強、学習に大人も子どもも、先生も生徒もないと思います。日々鬪っているのは人間みんな誰も同じだと思いました。私も中学生の頃があつたし、中学生の頃、こうやってみんな意見を語り合う、そういう場があれば、私ももう少しましな性格になっていたかなと思います。

自分を語るということをし出すと、私1時間くらいかかるので、もう時間がないので言いませんが、これからみんなと語り合う上では、いっぱい自分のことをみんなの気持ちに寄り添って考えていただきたいなと思います。

みんな、どうでしたか？今日の、前のここに立ってドキドキしながら、今の私のように足を震わせながら、声を震わせながらしゃべっている人の気持ちに寄り添えましたか？語った人、思いつきり自分のことが正直に語れましたか？もう一度振り返ってみてください。

他人の思いに寄り添う、これは「連帶」です。自分のことを語る。人のことに「共感」する思いがないとなかなか語れないと思います。これからもこういう場がいっぱいあって、みんなの思いがどんどんどんどん深まってほしいと思います。私も心を深めていきたいと、本当に思います。

私がこんな年になっても教師になって、みんなの前で喋る原動力は、みんなは豊田さんの話がたくさん出てきたけど、もう30年前に出会った男の子。その子に恥ずかしくない生き方をしたいからです。その子がいつも「先生、輝いていますか？」って、なんか、そういうふうに言ってくれているような気がするんです。

30年よりもっと前ですね。14歳の中学生のその男の子に会って、私は先生としての立場じゃなくて、人間として中学生に接するということを学びました。上から目線じゃなくて、人の気持ちに寄り添う。中学生のその思いに寄り添う。そういうことを学んだんです。その子に恥ずかしくない生き方を私はこれからもしていきたいと思っています。以上です。

Y中学校は3年生48人です。2クラスです。2人の若い担任がいます。その若い担任にもこの言葉は沁み込んでいくし、やっぱり子どもたちに喜びを与えます。本当に言葉の力って凄いです。14歳だった男の子とは、パネリストのN君です。もう44歳です。N君、会場に、C先生がおいでます。C先生の熱い言葉にふれ、いろんな思いが私の中にあります。30年前が昨日のことのように蘇ります。これが人権教育のよろこびなんだと思います。それでは、N君、どうぞ。拍手をお願いします。(拍手)

《パネリスト N》

はじめに

失礼します。Nです。Y先生の話も、M先生の話も聞かせていただいて、今年で、ここ3年連続でこの場に立たせてもらっています。それでもやっぱり、前で頼めんかと言われると断れない自分がいて、寄り添いたいといえばおこがましいんですけど、元気を出してもらえたならというか、ちょっと力になりたいなというのが、多分これからもあるでしょう。

さつき、Y先生の話を聞かせていただいて、「いま　ここ」での発言。若いエネルギーって凄いなあというか、僕もお話を聞かせていただいても理解のできないこともあるけど、発信していける姿っていうのが、いいなあと思います。

(笑顔で)昔の自分たちのことを思い返させてくれるというか、多分、同じだった気がします。僕たちも周りの子を巻き込むというか、どりあえず、言って伝えてみたいな感じでした。そのスタイルは今も変わらずやっていけています。それは、やっぱり後を受け継いでいってくれる(前列に座る高校生たちに向かって)君たちがいたりとか、そういう、僕たちがやって来たことがそこに繋がつ

ているという自信があつたりとか、それを高校生にも感謝するし、これからの中学生たちにも感謝していかなければと思います。それを感じさせてくれた先生方とか、僕たちの先輩とかにも感謝していかなければなと思っています。

多くなった人と関わることで感じること

最近、いろいろなことにバタバタする中で、いろんな人と関わることがすごく多くなりました。PTAという部分で、会長をしているんですけど、今年で4年目ですが、いろんなところで繋がりができたりとか、「ああしよう」、「こうしよう」みたいな話をすることがたくさんあります。

おそらく、今日のこの会も、「地域発信」ということで声をかけられて来られた方々もいると思うんです。何かしら他の地域で人権に携わっておられる皆さんだと思います。僕たちも今は徳島市内に住んでいますが、やっぱり子どもたちのことを思うとか、そこにいる老人たちのことを思うという環境というのが凄くあるんです。

(イキイキと身振り手振りを加えながら) コミュニティスクールとか、CSポートフォーリオというものをこれから導入して行って、学校とかに地域の人が参加して子どもたちを見守っていくとか、地域の方で地域を盛り上げていくみたいなことにも力を入れて、今勉強をしていくかなと思っているんですが、一緒にやっていくうという思いのあるメンバーと、僕はどこに行っても人権の話をします。

関わっていった後、同和問題の話をします。いい仲だなあとと思って話をして、「講演とかにも行って話もするよ」という中で、同和教育の話をした時に、「そんなのでも一緒やろ?」って言われました。それはどういう人が言ったかといいますと、地域をまとめてこれからやっていくう、頑張っていこうという、僕らよりも少し年上のこれから活躍していくというような人が、そういう発言をします。

そういう方たちが子どもたちを守っているのか。じいちゃんばあちゃんを守っていけるのかと思います。そこにある問題に目をつむるではないけど、同和問題って問題じゃないと言える人間が、一人の子ども、一人のじいちゃんを、一人のばあちゃんを、そして家族を守れるのかという話なんです。僕から言えば。

地域の方がおられるとそういう話もしたいんですけど、今日こういう話を聞いて帰った後に、こういう話があったとか、人権をテーマにした話題を、職場の部署でとか、家族とでとか、自分の環境で落とし込んでいただけたら、また、形として一つの成果が上がるのかなと思います。

形としてでなくして、今から話をするのは、自分の問題というか、部落問題であるという話をしたいんですけど、動画作成をM先生から依頼されて、たくさんの素材をいただきました。できる時間も正直なかつたんですけど、送られてきたいろいろな人たちの発表の動画とか写真を、やっぱり見てしまうんです。去年の自分がここで語った時の自分自身の話とか親父の語った様子とか、いろんな方の語りとか見ていて、(照れくさそうに)動画をつくる間も散々泣いて泣いて。

思い出に浸ってきたので、今日は多分泣くことはないと思うんですが、こういうのをつくっていたら、同和教育というか、人権問題の中に自分があるというよりも、僕の場合は、同和教育の中に自分があるんだろうなと思いました。

大事なのは人権教育を通じて同和教育やいろいろな差別問題を吸収すること

僕が育ってきた環境というか、築いてきたものが同和教育であつたし、だから、この同和教育とか部落問題とかいう定義で話をする時は、結構、言葉が詰まるというか、誰かと話をしていて、同和問題の話、部落問題の話というのは、なかなか切り出せないんですね。

「何言ってんねん」というケースが結構あります。でも、こういうふうに自分を語りたいという思いはどこかにあります。つながってきた人に、人権教育を落とし込みたい自分がいるんです。それをつなげたいという自分がいて、僕はいろんなことを学んできたつもりでいるんですが、なかなか理解できないこともあるんですが、やっぱり大事なのは、人権教育を通じて、同和教育であるとかいろいろな差別問題を吸収することで、いろんなテーマに対して後押しするというか。

さつき「無知は…」という話がありましたが、知ることは大事だと思うし、土台がしっかりしていたら、知ることに興味も沸くようになるだろうし、向き合うことがすごく大事なのかなと思います。

娘とのやり取り

(娘との場面に思いを馳せながら)動画をつくつていて、夜の11時頃にはほぼほぼ完成していたくらいに、今年のこのフォーラムのチラシの裏面に、僕の娘とのやり取りや家族のやり取りの新聞記事がちょっと載っていますけど、娘に、この新聞記事を覚えているかと聞いたら「それ見たことある」という話をしてくれました。

今回、冒頭に石川さんの写真を載せさせてもらったんですけど、娘が同和教育にアンテナを張り出したのは、「となりのトロ」の都市伝説で、「狭山事件が…」っていう話。これは都市伝説です。子どもたち2人がSNSとかで、まず知るのが狭山事件。そこに興味を持ったのが娘であって、狭山事件でこういうふうに捕まつてという話を一応して、「ふーん」「ふーん」と言いながら、中学1年になりましたが、話を聞いてくれました。あまり深い話を夜の11時にするのも何なので。

そういうやり取りをしながら、あまり言い過ぎると「パパは言葉が強いけん、聞くのがしんどいよ」って言われることが最近よくあるので、年頃の女の子なのであまり深い話はしませんが、いろんなことを喋つた時に、娘の方から「ぱぱ、ちょっとこの宿題教えて」って。それまでは、そういう場はあまりないんですけど、夜遅くに2人で夏休みの宿題を一緒にしたのを思い出します。

そういうちょっとのきっかけで、家族に生かされているなど、そういう気になっています。そういうことを思つていて、娘に対して、小学校4年生という小さい時に打ち明けたんですけど、打ち明け方って成功だったのかなというか…。

入り方が大事な人権教育・同和教育

(中学生時代の自分を思い出しながら)いろんな問題があると思うんですけど、入り方って大事だと思っているんです。昔、僕は当時の学習会に行っていました。学習会は小学校の頃から行つたけど、楽しいことが多かったです。1泊研修があつたりとか、そこに行けばパンを食べたりとか、ドッヂボールをしたりとか、楽しいことをきっかけに、後々部落地区という流れになって、こうですよとなつたんです。でも楽しいという感覚はあつたように思います。

自分の子どもに伝えた時に、楽しいことの入り口がどこにも見つからなかつたんですね。人権教育っていうか、同和問題を伝えることの楽しい入口。(笑顔で)僕自身を見てくれたら、それは楽しいだろうと思ってくれていると思っているんですけど、子どもはそうは思わないですよね。誰かにとつての入り口、入り方っていうのは、それは凄く大事だなと思います。

なんか、部落問題って、こういうことがあつたりとか、差別されたりとか、さつきの、M先生の動画上に出てきたY町の話がありましたけど、Y町で差別とかがあつたという過去の話として、子どもは表現をしていますけど、やっぱり、今でもあると思うんです。そういう部落差別の現状というのは。

イキイキと輝いた生き方を

M先生に、先日、「部落差別ってあると思うか」って言われたんですけど、(自分と対話するように)やっぱり、自分が言いにくい瞬間というのは、自分が部落差別を残している瞬間であると思うし、僕たちがスムーズに語れるようになったら部落差別がなくなつたって言えるんじゃないかなと思うんです。部落差別をなくすという定義は意識を変えるということだから、そういう意味では目に見える部落差別というのは、なかなか僕らも感じづらいけど、僕らがちょっと生きづらさを感じてしまうというか、娘に伝えづらいというのが自分自身、部落差別を残してしまっているのかなと思つたりしています。

今日、久しぶりに同級生のH君と会つて、T君も来てくれて、30年前に出会つた教え子として、G先生の「輝いていますか?」という話が流れているのは。輝いていることはすごく大事だと思うし、T君も同級生ですが、イキイキと生きるためにには、具体的には言いませんが、人としてどう輝けるか。僕は、結構具体的に知りたいというか、言いたいんですね。具体的にこれがこうなれば、こうしたら良くなるとか。

どうかしたら、正解の提示にもなるんですけど、(笑顔で)イキイキと生きてきた。輝いてきたという。ようやくそれがわかつた気がする。それはやっぱり、去年のこのフォーラムに来た時もそうだし、先生の語りもそうだし。先週かな、Y町の現場に子どもたちをプールに連れて行って、Y中学校を見た時に、Y町っていい町やなあと。プールで子どもが遊んだらイキイキしていた。その姿を見ながら、こういうことかなと思った。

そろそろ何を言つたらいいのかわからんような時間になつてきたんですけど、とにかく、いろんなところでアプローチをしていくつているんです。

しっかり伝える 自分の言葉で伝える どこかで発信していくことの大切さ

(元気よく)さつき、H君とちょっと話したんですけど、どこかでは言える。この場では言える。自分が発表できる。自分のことを語る。この場だったら浄化されて、自分の意識もなくなっているかもわからないんですけど、ここで考えた以上、どこかにグッと出さなかつたら、発信をしなかつたら、抱え込んでいるのももつたいないし、もしかしたら、抱え込み続けることで、ダメージをくらってマイナスになることもあるかもしれない、知った以上は、中途半端に勉強するのではなく、どこかで発信していくことが大事だなどいう、そういうステップにも(前の席の中学生に笑顔で)中学生もやっていいほしいなと思うし、高校生も自分の気持ちに気づいて、ここで浄化させて誰かに伝えるという作業は、すごくいいかなあと思います。

しっかり伝える。自分の言葉で伝える。それが「語り合い」という所につながるかなと僕は思っています。ちょっと自分でもコントロールできない話で申し訳ないですけど、ひとまず以上です。(拍手)。

【前半3へ続く】